

趣味に没頭した母の晩年

関 直彦（弥生の次男）

母は晩年が近づくとつれ、それまでの遅れを取り戻そうとするかのようにいくつかの趣味に没頭し、多忙な毎日を過ごしていた。まずは永年手掛けてきた園芸。来る一年間の種まき計画を綿密に練って、冬は除き、庭に色とりどりの花が絶え間なく咲くようにしていた。花を愛するところは、父親譲りであろう。雑草取りは、私の役目である。

次に写真撮影。元々は、丹精こめて咲かせた花を記録する目的で撮影していたものだが、次第に対象を広げて、歩行が困難なのにかかわらず、杖とカメラを手に近隣や公園を歩き回っては風景、花、鳥、雲などの自然を撮りまくっていた。素人写真家のコンテストに応募して入賞したこともあり、結構芸術性豊かな作品をものにしていった。

もう一つ熱心であったのはパッチワーク。以前から端切れを集めて、趣味の良いベッドカバーなどを作り、周囲の人たちにあげるのを趣味としていたが、加齢とともに大きい作品は扱いにくくなったのであろうか、もっぱらパッチワークでセンス良いポシェットを作るようになった。ある時、ファッションの街・自由が丘に小さい洋品店を営んでいる人がそれを目にして、自分の店で売りたいので作って欲しいと頼まれた。自分の作品を認められたのが余程嬉しかったのであろう。経済的な必要は何もなかったが、それを機にポシェット作りに熱中し、毎日深夜まで制作に取り組んでいた。店主は「これは 94 歳のお婆ちゃんが作ったものですよ！」と客に自慢げに説明していたという。母が亡くなった後で遺品を整理したところ、完成した色とりどりのポシェットが百点ほど出てきたのには驚いた。趣味に没頭し過ぎたことが、命取りになった肺炎を病んだ原因かもしれない。

母は幼くして実母を失うという不幸があったものの、気難しくも親身に心配してくれる父親に大事に育てられた。そして裕福とまでは言えずとも、比較的恵まれた環境に育った「お嬢さん」育ちであったが、結婚して間もなく、戦中戦後の苦難を人並みに経験し、また四人の息子を育て上げる苦労があった。1990 年に夫に先立たれると、それで得た暇を無為に過ごすことなく、趣味に熱中するようになる。満ち足りた思いであったろう。母の長兄・東一が 1990 年に他界した後、寅彦の最後まで生き延びた遺児として、そして遺族代表として高知との繋がりが深まり、寄稿を頼まれる機会も増えた。そうして深まった縁もひとつ楽しみだったようだ。

母はかつて友人を見舞いに行った際に、その病院で転んで腰を痛め、手術して人工股関節を入れていた。そのため歩行にいささか困難をきたしていたものの、最後まで驚くほどの頭脳明晰さを維持し、ボケの兆候を示すことは殆どなかった。そのため周囲では皆、百歳までは問題なく生きるであろうと信じていたのに……。今年も夏になると、母が大切に育てたノウゼンカズラが、庭でサーモンピンクの花をたわわに咲かせていた。